

海外インターンシップ	
日本の口琴	
山下 正美	比較社会文化学専攻
期間	2008年10月17日～10月31日
場所	ロシア連邦サハ共和国ヤクーツク市
施設	世界民族口琴博物館、極北芸術・文化研究所、サハ（ヤクート）国立大学

内容報告

海外インターンシップの必要性と目的、得られた成果

博士論文では、ロシア連邦サハ共和国を中心に暮らしているサハという民族の音楽について執筆する予定である。筆者は卒業論文で、日本の口琴について研究し、その過程で日本の口琴の中には、北方諸民族から伝わったものもあったことがわかった。そこで修士論文では、北方諸民族の中でも特に口琴のさかんなサハを対象に研究を進めた。修士論文では、口琴音楽の担い手であるサハの演奏家に注目し、彼らが現在どのように口琴音楽の伝統を受け継ぎ、再創造してきているのかを考察した。

博士論文では、さらにサハの口琴以外の楽器や民謡について、サハ民族音楽の歴史の変遷、周辺諸民族との関わり等についても考察を加えていきたいと考えている。そのために今回、海外インターンシップの実習先として3カ所の研究・教育機関をまわった。これらの機関の性格と、選んだ理由、目的、得られた成果は次の通りである。

実習先1. 世界民族口琴博物館(兼国際口琴センター)

世界で唯一の口琴博物館であり、サハ人の口琴を中心に世界の諸民族の口琴および関連資料の収集・展示・研究などを行っている。館長ニコライ・シシーギン氏の協力をあおぎ、2008年10月27日に、ここで「日本の口琴」と題した講演会をロシア語とサハ語で行った。講演の内容は、筆者の卒業論文での研究成果をもとにしたものである。卒論に収録されている画像資料の写しを持参し、説明に用いた。

また今後の筆者の研究資料として、博物館展示品の解説文書や刊行物、音源、カタログのおさめられたDVD等入手した。これらのほとんどは、日本で入

手不可能なものである。

口琴に関する歴史的文献史料の展示や過去の口琴製作職人（鍛冶師）、演奏家等についての資料は、博士論文でサハ民族音楽の歴史の変遷を考察するために参照する。

実習先2. サハ（ヤクート）国立大学

首都ヤクーツク市内にあるサハ共和国国内最大規模の総合大学である。外国語学部東洋言語学科に日本語専攻もある。サハ語学科のイヴァン・アエクセイエフ教授は、言語学者であると同時にサハの口琴音楽中興の祖としても高名な人物である。アレクセイエフ教授に今後の研究の進め方についてご相談し、それをもとに文献資料も収集した。アレクセイエフ教授の活動が口琴音楽の復興にどう寄与していったかについて、『東洋音楽研究』などの学会誌に発表していきたいと考えている。

また大学では、サハ語の授業に参加し、留学生向けの授業も受講した。さらに日本語専攻では、10月29日に通訳学科3年生の日本史の授業で「日本の口琴」についてロシア語とサハ語で授業をした。日本から持参した日本地図を説明に使い、口琴の存在した平安時代や江戸時代の日本人の生活についても触れた。授業の担当者ジナイーダ・ステパーノヴァ先生からは、筆者の授業で「学生たちは新しい発見がたくさんあったようです」とのコメントを頂いた。

日本語専攻の学生たちとは、日本語の授業や、学生主催のパーティーに呼んでもらったり、図書館で会ったりと交流の機会が多くあった。そうした交流から見てきたサハの学生たちについては、『ユーラシア研究』第40号に掲載される予定である。

実習先3. 極北芸術・文化研究所

極北芸術・文化研究所に所属している民族音楽学者ユリー・シェイキン教授は、北方諸民族の音楽文化の研究に長年従事してきた功績で、2007年小泉文夫音楽賞を受賞した。

シェイキン教授にお会いし、日本の口琴をはじめ民謡や民俗芸能について映像資料を用いながら、ロシア語と一部英語で説明した。特に、卒業論文の際に詳細な情報が得られないままだった、斧を使った口琴奏法について伺った。図像資料をお見せしたところ、これは現在もウデヘヤナナイなどの民族のあいだで行われている奏法で、音を大きくするためのものであるという情報を得た。さらに、このことについても触れているという『北方諸民族の音楽文化史』（2002年、モスクワ）と題されたご著書を頂いた。これは、サハを含めた北方諸民族の音楽文化史についての網羅的資料であり、筆者の博士論文執筆に際しては、特にサハと周辺諸民族との関係を考察するために用いる。

おわりに

今回の海外インターンシップで、現地の研究者や学生を対象に筆者のこれまでの研究成果（特に日本の口琴）や現在の研究状況について発表し、また今後サハの民族音楽研究していく上で有益な情報や参考資料を多く得ることができた。ここで得られた成果は、『音楽学』『東洋音楽研究』『民族芸術』などの学術雑誌に寄稿していく予定である。また筆者のウェブサイト (<http://www.geocities.jp/kerecheene/index.html>) にもページを設け、広く成果を公表していきたい。

やました まさみ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

研修者の山下正美さんは、卒業論文ですでに日本の口琴について、現在までに入手できるすべての研究資料を駆使して、その通時的ならびに共時的な視点での研究を行なった。その際に、北方民族からの影響があることが明らかとなり、修士論文では、日本の北方地域に当たる、サハ共和国に焦点を当てて、実際にフィールドワークを行なうことによって、現在のサハにおける口琴演奏の状況を考察した。

このような研究の背景を持っているので、今回の海外インターンシップでは、サハ共和国の代表的な研究機関を訪れ、講演や授業を行なうことで、現地の研究者との交流と資料収集を行なうことができています。また、サハにおけるだけでなく、国際的に口琴の研究と演奏において権威のある3人の研究者、すなわち、ニコライ・シシーギン氏、イヴァン・アレクセイエフ氏、そしてユリー・シェイキン氏と懇談し、新たな資料や情報を得たことは大変意義深いことである。これらの活動は、日本の口琴研究を、サハという国際的に口琴研究の進んだ場所で、紹介するだけでなく、これまで明らかになっていない、北方民族からの影響についての研究に、大きく寄与することとなっている。

また、日本の口琴を世界の口琴のなかに位置づけることは、日本の音楽を含めた文化の多様性が、北方民族との交流の中で構築されてきたことを示すことになり、音楽学において、大変大きな成果が得られたと言える。日本において、北方民族に関する研究は、谷本一之氏を代表とする研究が中心となっているが、今回の研修においては、口琴の音楽という切り口で、日本と北方民族との関係を深める可能性を拓くものとなった。

山下さんの博士論文においては、今回のインターンシップが、大変有効にかつ重要な意義を持つことは明らかであり、学界への貢献が期待される。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 永原 恵三)